広告

いしかり産

▲表紙の大きな葉は、ゴボウの葉でした!　※撮影は昨年10月に行いました

歩けばポタポタ▶する砂地の畑!ここでは甘くてやわらかなゴボウが育ちます。

生振の砂地がはぐくむやわらかゴボウ

雪解けのころ、生振地区の中田農園では1mほどに育った長くて太いゴボウの収穫が再び始まります。

「土の中に長い根を張るゴボウにとって砂地の多い生振は最適な環境なんです」と話してくれたのは中田農園の三代目・中田直幸さん(38)。32歳でサラリーマンを退職し、祖父の代から続く畑を父・幸吉さんと共に支える中田さんは、有機肥料をはじめとする新しい栽培技術を取り入れながら若手農業家として奮闘しています。

「父のすごさを感じるのは種まきのときですね。ゴボウは深く植えると発芽しづらく、浅く植えると砂地なので種が飛んでしまいます。そこは感覚がものを言うところで、毎年、父が土に指を入れては植える深さを決めています」

ゴボウは秋にも収穫されますが「寒い冬を土の中で過ごしたゴボウの方が、甘みがのっていると思います」と中田さん。その糖度はなんと25度! とのことで、食感もやわらかいと評判です。

「これからも先代の技と新しい栽培技術で、よりおいしいゴボウを作っていきたいです。おすすめの食べ方はきんぴらごぼう!　定番ですが、やはりゴボウ本来の甘みと食感が楽しめると思います。生振のゴボウでぜひ作って食べてみてください」

なお、3月19日(土)・20日(日)に開かれる「石狩市公民館まつり」(22ページ参照)では、中田農園の越冬ごぼうも販売される予定です。こちらもどうぞお楽しみに!

■中田農園の「ゴボウ」が購入できる所

- 中田農園直売所(生振182-1 ☎64-9125)
  ※3月20日ごろよりスタート予定
- JAいしかり地物市場(樽川120-3)※4月中旬からスタート予定
- 市民図書館喫茶コーナー(花川北7-1)

◎石狩随想 53

弘報から広報へ

この号は七百回目の出版記念号となる。「弘報」は戦後GHQ民主主義による国政・地方政治の姿を国民・住民にPR(Public Relations)するため始めたもので、本市の初刊は昭和二十六年九月号「いしかり町弘報」を嚆矢(こうし)とする。当時PRを翻訳するのに「弘報」「報道」「情報」「秘書」等の文字を考えたという※。「いしかり町広報」となったのは、戦後十年を経過した昭和三十年一月号からである。広報巻頭の町長挨拶(あいさつ)は、「独立国として三年目を迎えた。十年間の隠忍自重から、本当の芽生えて行く段階に立至った」と述べている。「官と公」の認識があいまいな日本において、戦後民主主義が根付き始め、官が広く知らしめる「弘」から公として情報を広める「広」の文字に変わった。この一文字の持つ意味は実に大きい　◆今日、情報社会の到来で、インターネットを通し、動画すら容易となった。「知る権利」の高まりとともに、なお進化を続けており、広報は紙媒体情報としてなお一層の真価が問われる

◆折しも市広報は「第五十七回北海道広報コンクール」で入選となった。編集技術か、その姿勢を評価されたかは良く分からないが、市民読者が増えていることは実感している。スタッフと共にこれを励みとして八百号へと継ぎたい。　(市長)

※参考文献／三浦恵次「行政広報戦後史　小山栄三と日本広報協会」月間『広報』平成九年五月号